

モハメド・ラシュワンさん(左)は、ロサンゼルス五輪(一九八四年)に柔道のエジプト代表として参加した銀メダリストです。決勝戦で日本代表の山下泰裕さんと対戦しました。当時、山下さんの負傷した右足を狙わずに敗れたことで、国連教育科学文化機関(ユネスコ)のフエアプレー賞も受けました。ラシュワンさんは現在、エジプトのアレクサンドリア市に住居。地元の柔道クラブでエジプト人の子どもたちに柔道を教えています。取材当日、次男のアムル君(右)も練習をしていました。

ラシュワンさんの参加したロサンゼルス・オリンピックには、旧ソ連や東欧諸国が米軍のグレナダ侵略に反対して参加せず、その前のモスクワ・オリンピック(一九八〇年)では米国がソ連のアフガニスタン侵攻に抗議して参加しませんでした。国際政治がスポーツに否定的な影響を与えていた時期を振り返りながら、スポーツの平和への貢献、柔道への思い、山下選手の思い出などを語ってもらいました。

(カイロ) 松本真志
ラシュワンさんが見守るなか、練習にはけむるエジプト人の子どもたちアレクサンドリア
(松本真志撮影)



「スポーツは平和に貢献できる」と語るラシュワンさん(左)と息子アムル君(右) (松本真志撮影)

柔道をはじめたのは、一からすめられ、柔道を開始したのは、一九七〇年の夏です。当時、エジプトでは日本の武道で空手や剣道はなくて、柔道もあまり知られていませんでした。バスケットボールをやっていた私は、たまたま友人から勧められ、柔道をはじめました。練習を重ねるうちにこのスポーツがとても好きになり、アレクサンドリアの大会で初めて優勝して以来、真剣に取り組みようになりました。

ロス五輪エジプト代表(銀メダリスト)
北京五輪柔道競技審判

モハメド・ラシュワンさん

世界中のひと

柔道からは、礼儀、スポーツマンシップといったマナー、「時間厳守」など多くのことを学びました。柔道から得たもう一つの話は、スポーツを通じて世界中の人々と仲良くなれたことです。国同士が対立関係にあっても、スポーツは人々を結びつけ、相互理解を助け、平和に貢献することができると思っています。私自身、敵対する国の選手同士が対戦するの

さず、日本でエジプト代表団に何度もアドバイスしてくれました。

女性参加の道

今日、柔道はエジプトでも盛んになりましたが、それでも競技人口は一万五千人です。日本のように中学校や高校で教えるまでにはなっていない。

女性が柔道をするこへの障害も多いといえます。エジプトでは女性がヒジャブ(イスラム教徒の女性が身に着けるスカートを着用する場合が多い)を着用する場面が多いのですが、国際柔道連盟はヒジャブの着用を認めていません。

エジプト以外の中東諸国では、チュニジア、モロッコ、アルジェリアなど北アフリカの国々で女性選手が育っています。チュニジア、アルジェリアの女性代表が世界選手権で優勝したこともあります。しかし、湾岸諸国では女性の競技人口は皆無です。

を見たことがあります。二人は国の対立とは関係なく、フェアに試合をし握手していました。オリンピックの決勝戦で山下さんの右足をなぞ狙わなかったのかとの質問をよく受けます。私は柔道を通じてモラルの大切さを学びました。スポーツマンシップとイスラムの教えが私にひきょうなふるまいをするのを許さなかったのです。そういう意味では、たまた勝てばいいという傾向を最近見受けるところを残念に思っています。

山下さんは私の目標でした。彼は柔道の歴史で奇跡的な実績を残しました。彼との試合は私の人生にとっても重要な経験でした。彼は笑顔を決して

私自身は、柔道やることを家族みんなが応援してくれました。妻は日本人で私のやることをよく理解してくれています。日本は私にとって第二の故郷ともいえます。北京オリンピックでは私は審判として参加しましたが、エジプトから女性を含め三人が参加する予定です。日本もがんばって金メダルを獲得することを強く願っています。

柔道で学んだ平和

